

321 進行卵巣癌症例に対する経口 etoposide を用いた modulation PAC 療法の有用性に関する研究

浜松医科大学

杉村 基, 前田 真, 小林 浩, 小林隆夫, 能登裕志, 寺尾俊彦, 川島吉良

〔目的〕進行卵巣癌症例に対して、手術療法に続く、白金製剤を基本とした多剤併用化学療法の導入により、一次効果が認められるようになったが長期予後改善は未だ十分とは言えない。そこで我々は、進行卵巣癌症例に対する寛解導入化学療法後に、経口 etoposide を用いた化学療法を行い、延命効果、抗腫瘍効果、quality of life(QOL)の三つの観点から、その有用性について検討を加えた。〔方法〕臨床進行期Ⅲ期Ⅳ期卵巣癌 37 症例に対し、全例手術療法を行ったのち、寛解導入化学療法として CDDP, ADM, CPM 併用化学療法のみ行った 23 症例 (PAC 群) と、PAC 療法ののち経口 etoposide (50mg 2週投与 2週休薬) 投与を施行した 14 症例 (PAC-E 群) の 2 群に分け、背景因子を検討した後、Kaplan-Meier 法により累積生存率を算出した。また、固形がん化学療法直接効果判定基準により、経口 etoposide の抗腫瘍効果を判定した。さらに、自覚的副作用の程度から QOL を評価した。〔結果〕PAC 群の生存率は 60% (12カ月)、30% (24カ月) であるのに対し、PAC-E 群は 85% (12カ月)、74% (24カ月) と後者のほうが有意に生存率が高かった。50% 生存期間は、前者が 14カ月であるのに対し後者が 48カ月と有意に延長していた。しかし、経口 etoposide 投与中の CR, PR 例は認められなかった。自覚的副作用の程度は脱毛等 grade 1 と軽度で、日常生活への影響は低かった。

〔結論〕進行卵巣癌症例では、PAC-E 療法により、生存率の向上が認められた。さらに、通院治療が可能で、副作用の面からも QOL を損なわない治療法であることが確認できた。

322 卵巣癌 I - II 期に対する cisplatin, Adriamycin, ifosfamide (PAI) 療法の治療成績

国立小倉病院

西田 敬, 小田高明, 中並正道, 上妻益隆

〔目的〕残存病変の sizeこそが重要な予後決定因子と認められている様に、細胞、組織 level や、径 2 cm 以下の最小可視癌などの残存病変を完璧に撲滅させ得る事が現行の卵巣癌化学療法の policy であり、また課せられた期待でもある。この見地から早期卵巣癌に対する cisplatin (50mg/m²), Adriamycin (50mg/m²), ifosfamide (5mg/m²) [PAI] から成る化学療法の効果を検討した。

〔方法〕治療後 3 年以上を経過した stage Ic (FIGO) 以上の早期癌 19 例を対象とした。内訳は Ic 7 例、Ic が 12 例である。初回手術として性機能温存を熱望した 2 例以外は後腹膜リンパ節検索を含む系統的 staging surgery を行なった。PAI 療法を計 5 コース施行した後、second-look operation (SLO) にて histo-cytological に残存腫瘍が無い事を確認し治療終了とした。副作用は UICC の criteria にて評価した。

〔成績〕SLO 時、光顕レベルの腫瘍残存は全例認めなかった。治療終了後 38-56 ヶ月 (平均: 49 ヶ月) を経て全員、再発徴候なしに経過している。

grade 4 の leukopenia を含む副作用は時に抗生剤等の支持療法を必要とするが一時的であり容認できた。保存手術を受けた 2 例では月経再開している。

〔結論〕PAI combination の婦人科腺癌に対する有効性は本学会でも発表してきたが、今回の検討で特に stage Ic 以上の早期卵巣癌に対しても有用な first line regimen であると考えられた。